

## 「思い出」・未満の記

八木 千恵子

荒木先生が筑波大を去られるにあたり、学恩の大きさとお世話になった時間の長さにたいしての感謝を申し上げたいと思う。そして、同時に私の胸中に去来するのは、いまだそれに十分に報いることができていないという忸怩たる思いである。なんといっても、筑波大学第二学群比較文化学類に入学してからの十数年の長きにわたって、荒木先生のうしろ姿を追いつづけてきたのだから。

私にとって荒木先生とは、「知」のあり方、その方向性を指し示してくれるまさに「道しるべ」のような存在であり続けてきた。大学生となって、それまでの入試対策としての勉強のようなもの、あるいはその延長としてしか学問なるものの概念をとらえるすべを知らなかった私に、先生の講義は、知識の伝達というだけでなく「考える」ということそのものにたいして目を開かせてくれるものであったのであり、大学という場がこれまでの「学校」といかに異なるかを、「学問」の名において非常な具体性を以って示してくれたのである。よく言われることであるが、受験に向けて構築された高校までの勉強は正しい答えを正しく導き出すこと、それができるとに至上の価値が与えられるものであるが、学問・研究の場としての大学におけるそれは、必ずしも正しい答えが見つかるとは限らない、次々に問いの連鎖を生み出して行く終わりのない営みそれ自体である。それをいかに真摯に追究するか、究極的にはその点のみが価値をもつ、そのような場として大学という場があるということ、私は先生の講義を通じて学び得たのだと思う。やがて荒木先生の薫陶のもと大学院へと進むことを得たのであるが、それはもはや「考える」だけにとどまらず、「研究する」主体としてふるまわねばならない、そうすることをみずから選び取ったはずの人間として自他共に認めてもらわねばならない、そういう立場に立ったことを意味しており、それにともない先生の講義内容もまた、「研究」という営為の、その広さ、深さ、そして恐ろしさや孤独をも、垣間見せてくださるものとなって行ったのである。一学生として学問を志す上で、つねに私のもっとも根本にあるものを支えてくれていたのが、荒木先生存在であったといえるであろう。

いまだ道半ばにある私には、荒木先生を「思い出」として語ることはできない。つねに先を行っておられる先達として、これからもご研究の成果を還元していただき、さらなるご鞭撻を賜ることを願うばかりである。